seregde-, serekde- は sere- といふ動詞の受身の形で、sere は蒙文彙書に「覺」、Kowalewski の蒙・露・佛語辭典に 1). s'eveiller, se réveiller, 2). toucher, sentier, 3). concevoir, savoir 等と譯し、Schmidt の蒙・露・獨語辭典には im Voraus wissen oder verstehen, eine gründliche kenntniss haben; einsehen 等の譯を施してある。要するに「覺る」を本義として、それより醒むる、知る、注意する等種々の義を轉出したものであること疑無い。裏面漢文に「關レ僞、防レ奸、不レ許ニ借帶ニ」とあるに照應せしめると、この牌を僞造借帶する如き奸惡を冒さば覺知せらるの義で、これを禁止したるに外ならぬであらう。石濱氏は余に宛てた私信に於て、「惡を注意すべし」と解くべきかと報ぜられた。尙ほ考へて見るべきである。韓穆精阿・鴛淵一兩氏共著の蒙和辭典には、sere- に「防守す」の譯を施してある。今この譯の基づくところを知るを得ないけれども、思ふにまた「覺る」といふ本義から出たものに外ならぬであらう。果してこの譯據るべきであらば、その儘漢文の「防レ奸」に相當せしめることが出來る。アラビヤ文字で書いたものについては今なほ適當の解釋を得ない。後日の研究に讓らなければならぬ。

さてこの牌について特に注意すべきことは、圓牌の表面頂點の圓環を取り附けた處に、鳥の形を刻出して居ることである。寫眞によつては一見その形の何であるかを識別し難いやうであるけれども、仔細に見ると正面を向いた鳥が兩脚を揃へ、翼を張つたのに象つたもので、その頭・嘴・毛並等は鶻(ハヤブサ)の姿を彷彿せしむるに足るのである。これに對應する裏面の中央は鳥の尾を揚げたのに象つたものと思はれ、またその下には兩脚を後から見たものと思はれる二本の線も見えてゐる。要するに平面に刻出した鳥の形を以て、牌面を裝飾したものに外ならぬ。かゝる特徵を有してゐる牌札を元代の所謂海青牌と認むるのは決して失當でないと思ふ。